

文化

情況に立ち向かうため

始動・合意してない プロジェクト

阿部 小涼

それは十月三十日、映画『Marines Go Home』を見て雨の県民総決起大会に参加した後のこと。それぞれに憤懣やる方ない思いを抱いて集まった私たちは血気盛ん意気軒昂。鼻息も荒く誰かが言い出し、日米政府による暴力的「合意」を拒否するため、

『Marines Go Home』を見て雨の県民総決起大会に参加した後のこと。

誰かが県民投票・県民大会を求める性急な心を抑えがたく、ゼネストや島ぐるみ闘争の過去に憧憬を抱き、軍国主義に向かう憲法改訂があるなら沖縄を「憲法難民特区」にしよう、これから住所は反国家地区「丁目だ！」などと盛り上がり

私たちに何ができるのだろう

うか。

想像力でつながる

りつつも、どこか醒めたアタマで、何が可能なのか、それを企むために私たちが集まっていた。まだ名前もないその企画は、このようにして誕生した。

旗揚げ、といっても掲げるべき旗もない。「委員会」でも「組織」でもなく、まずは、日米の暴力的「合意」を否定し批判するため、いろんな場所で、いろんな方法でアクションを起こす。それぞれが自分のできるプロジェクトを持ち寄って創る。私たちを表す名前さえ「誰もが見解の一致に至っているワケではない」のダブルミーニングを込めるといふ皮肉ぶり。あ

学、社会学、言語学、歴史学、文系に傾斜しつつも多様な分野を担う人々。確かなことは、あのヘリ墜落の体験から連携した研究者が、その延長線上のアクションと捉えて集まっていることぐらいだろう。

授業を市民に公開

アクションの命名に加え、私たちはまず次の二点をアピールすることにした。①県知事と名護市長は、基地県内移設に反対する地元の大学教授たちがコラボ

大学の開放、教員の解放

方面からの知を平和の学として結び合わせる試みとなることを期待したい。そして、伊江島闘争で理窟化された非暴力直接行動を想起しよう。伊佐浜闘争を支えた高校生、琉大事件で除籍処分を受けた大学生、金武湾闘争、軍隊による人間性の抑圧に抗する女性たちの闘い、これら抵抗者の名を呼び戻そう。過去の闘争をリスペクトし、現在につなごう。

普天間移設

抵抗運動「再創造」を

国家暴力に抗し公開講座

中心的、非組織的な実践を、抵抗運動の再創造に④想像力で、つながる。政治的意識の高まりは、見えにくいかもしれないけれども

テイストに、なるべく沢山の人が参加してもらえないかと期待も込めた。緩やかに広がるネットワークで、現在までに五十名ほどがメールで連絡を取り合っ

元として県民の圧倒的多数の声を十分に汲み、政策に反映するよう強く求める。今回の僧侶不当逮捕に抗議し、即時釈放を要求する。さて私たちのアクションの概要は以下の通り。十一月二十三日から三十日まで

しながら、自分の授業の「コマを公開する」、「自由！開放！」大学企画」が計画されている。国家の暴力的立法を超越し平和と正義の法を求める市民意識の涵養、これからの沖縄が目指すべき自治制度の模索、

に、まずは、小さく囁くことから始めてもいいと、私は思う。「合意？ 聞いてないよ」「そろそろゼネスト？」「()はひとつ島ぐるみで」。まず言葉にし

充満している。それが政治的アクションにつながっていく、そのような新しい運動のかたちを模索しよう、その点での合意を頼りに動いてみようと考えた。

十一月九日、ようやくこの集合体に名前が与えられた。合意してないプロジェクト。旗揚げ、といっても掲げるべき旗もない。「委員会」でも「組織」でもなく、まずは、日米の暴力的「合意」を否定し批判するため、いろんな場所で、いろんな方法でアクションを起こす。それぞれが自分のできるプロジェクトを持ち寄って創る。私たちを表す名前さえ「誰もが見解の一致に至っているワケではない」のダブルミーニングを込めるといふ皮肉ぶり。あ

た。①県知事と名護市長は、基地県内移設に反対する地元の大学教授たちがコラボレーション・ブックストア」は、アフリカ系たちの抵抗運動の支柱となる知を町の人々に知らせる場だった。その看板には次のように記されている。「知らない者は学べ。知る者は教えよ」。授業を公開し、知をシェアし、大学を開放することは、何よりもまず、私たち大学教授の解放でもあると信じている。

情況に立ち向かうために、まずは、小さく囁くことから始めてもいいと、私は思う。「合意？ 聞いてないよ」「そろそろゼネスト？」「()はひとつ島ぐるみで」。まず言葉にし

た。①県知事と名護市長は、基地県内移設に反対する地元の大学教授たちがコラボレーション・ブックストア」は、アフリカ系たちの抵抗運動の支柱となる知を町の人々に知らせる場だった。その看板には次のように記されている。「知らない者は学べ。知る者は教えよ」。授業を公開し、知をシェアし、大学を開放することは、何よりもまず、私たち大学教授の解放でもあると信じている。

米国防総省での共同記者会見を終え、握手を交わす町村外相(左)とラムズフェルド米国防長官。右は大野防衛庁長官(日本側の肩書は当時)＝10月29日(A.P.＝共同)



た。合意してないプロジェクト。

文学、思想、政治学、法

ブル」では、沖縄大学のミ

互に専門領域を横断し、多

互に専門領域を横断し、多